

神功皇后
三韓退治圖會



~13
3914
5





神功皇后三韓圖會卷之五

目錄

- 皇后祭阿波島明神
- 麿坂王狩於菟餓野落命
- 豐耳招老父問所天變之災
- 武内宿祢欺忍熊王
- 忍熊王最期
- 吉備鴨別連赴日向防熊襲

大正八年 月廿九日
本大學出版部 贈

神功皇后三韓圖會卷之五 目錄

后重く。向ふの社はつらなり神と祭らるる人速くも朕は告ぐと仰る
 まで宿禰も楚と心得ねばあつらの人は向極めあはれとて阿波島明神を
 少名彦名命と祭らるる社あり。とて奉る。阿波島の社とて
 向ふを見く。至る風景あり。其処に亦名付くや所。阿波島の社と
 和歌の浦より阿波島まで。西南へ隔つ。二里ありあり。皇太后は
 名命と祭らる阿波島の社あり。朕と皇子との病を祈らん。とて
 験のあり。是より皇后白紙とて。自らの
 雛形と截す。則ち龍體と撫さる。次は皇子の雛形と截す。則ち
 皇子の尊體と撫さる。阿波島明神と祈らる。右のひる
 ハ海中へと流し。病氣頓に平癒とて。是紙雛の始
 め。則ち此日三月三日の。されば紙雛ハ元年々海川へ流せ。との
 あり。つらの世より。大裏雛の。持つ。且大裏雛ハ
 近世用ゆる所也。上古ハ有ざる製作ありとの。大裏雛ハ唯雲の上也

夏と表して其身の祝ひ。其身を。偕夫より濱辺は生。母子神と臣
 下。命じて摘ませ。此艸の名ハ母子と呼て。朕が身と皇子が身とよく
 似。さ。と以て餅と多。阿波島明神へ病氣平癒の礼とて奉らんと
 彼母子草より餅を製させ。明神へと備へる。是三月三日ハ草の餅
 と祝ふ始り也
 因は紙雛ハ大小あり。則ち皇后と皇子との雛形。皇后の方
 ハ大きく。皇子の方ハ小さく。遺風あり。古ハ人生まば六箇月目迄ハ襦
 袍とて。そのもの。包む。皇子の雛形ハ則ち襦袍の中ハ体あり
 べ。人生まて六月目まで。包む。襦袍とむ。判
 ざり。又阿波島明神へ。小衣類。物と奉る。入る。此
 遺風あり
 又今三月三日の草の餅。蓬と用ゆ。ハ皇五十二代。嵯峨天皇

の御宇より始まれり。嵯峨天皇の御母上。三月三日は薨じたまひしに
天皇入御母を失ひ何ぞ母子と名つくる草を以てせんや。余の草を以て
代るべしと則ち功能もまきりのちり也。蓬を以て之を代させしむと
是より蓬を用ひ未だる事ありと云

麿坂王狩於菟餓野落命

爰は又麿坂王子。忍熊王子の兄弟の倉見別宿祢五十狹茅宿祢等と共に
は悪計をもち。播磨国赤石郡に父王仲哀天皇の陵と興く皇后の母子の
のりるを待たると云。皇后更に此知へりては。麿坂王子忍熊
王子はむろくくつら。我々兄弟皇后のあま未だるを待る間。菟餓野に出
て狩を催ふ。此度の我々が計略成就るや否と試みし。ついでに畧成るは
良獸と得人。又計略の不成るべし得物ありと云。此祈符は如何ぞと云
忍熊王子勇ましく兄の仰せ面白かるべし。疾其用意をゆるせんと。屬下の者ふ

下知と云。聴く両王子臣下と召連菟餓野に出狩と云。其色赤き
老猪何方より出まら。鼻嵐と云。荒巡り。假殿の上は在る。麿坂王子
とめつけ。飛登る。其形勢烈風のてくふと。王子の右の股と云。捕らるる
何條助らるるべき。終に命と落し多し。此由は入る駭き騒ぐと云。大うら
や。使む人かよく彼老猪の取得ると云。唯其身の用心をせむと云。あ
之はむろんと云。彼者一人も。此間も彼猪の行方あれず飛去る。是ふ於て
忍熊王子は此度の計略を。かくも皇后と撃奉ると成り。と云。倉見
別宿祢等と事と浅し。播磨赤石郡と引拂ひ軍兵と引卒して。一端摂津佳
へと移り。又々仔細あり。更に菟道へ引退き。あは屯と云。こ
更既斯のて。され神功皇后武内宿祢及び和珥臣の祖武振熊。忍熊王と撃
へ。と命じ。且皇后は小竹宮に遷らせむ。此際も。常夜の世と
夜のて。上古天照太神。天の岩戸を置らせむ。常夜の世と

ありしれは、皇后の御及、人々大の心と苦しむ。この有りける怪孽や、深き
恐ととすべし。

豊耳招老父問所天変之災

此時皇后御、駭うせらるひ、あは正しく天地の滅するの時なりと。紀直の祖豊耳
は仰せらるひ斯晝夜の分ちり、常夜の世と有りけるは、是全く朕が身の不
徳やして、天地滅するにあらん。位は万葉の高きありける。あは朕や、薄命
あり者ありし。去年の秋、天皇は別去りし。千辛万苦して、異国を征し
今少く心を安んじ、枕と高しする時を得しと、あは六躰坂忍熊の面王、疾き
且常夜の世と有りけるは、悲しむれども有りし。天氣曇りて、凡そなれば、豊耳は
何と勅各の言、業も有り。唯平伏してありける。漸あつて上り、有りし出
し、臣熟々案ずり、今晝夜の分ちり、是天地の滅するに、變りあり、あは
し、余は故ありと、覺へい、其も如何とされば、倘天地の滅するに、變りあり、

此地の事、人々や、臣承るに、此度の天変は、唯此処の事なりと。余所まあり、
知るべし、決して震襟と苦しむる事、有りし。臣は、上古の事を能知し、老人は、
此輩の元と正し、倘鬼神の爲業あり、願は、穰ひ清め、人々世は、庚と有り、
人、何変あり、通曉をせし、も、されば、変と正し、便りあり、と、皇后は、ひびき、
し、のけ、おきて、此あり、一、二とあり、と、庚と有り、老人とあり、と、豊耳、臣、天、変
の、災、所、と、正し、る、る、老、父、答、て、も、上、り、る、此、度、の、變、は、全、く、天、地、の、變、り、
あり、代、正、は、是、阿、豆、那、比、之、罪、と、い、惟、と、う、く、い、り、抑、當、皇、后、の、夫、王、足、仲
彦、天、皇、仲哀の、曾、祖、父、王、浴、目、入、彦、五、十、狹、茅、天、皇、十二代の、三、十、二、年、秋、七、月、甲
戌、朔、己、卯、帝、の、后、日、和、酢、媛、薨、り、多、く、帝、群、臣、詔、し、て、宣、く、朕、が、伯、父、倭
彦、命、薨、せ、り、所、殉、死、の、者、多、く、其、人、の、つ、ま、及、び、兄、弟、縁、者、歎、き、悲、し、む、の、
多、し、然、る、に、今、度、后、は、殉、死、の、者、多、く、朕、之、と、見、ら、ん、豈、忍、ん、や、大、古、より、此
と、あり、し、人、も、願、は、い、と、止、り、外、変、と、以、て、代、人、と、あ、り、如何、と、可、し

兩人精兵と選人引卒を忍熊王の陣營に攻寄る。此時忍熊王の臣
下、熊之凝りの大力益及の者ありて、堅横益及の働きの當りと幸ひ、斬
巡る。倉見別宿祢五十狹茅宿祢の兩人、大音上は士卒、下知る。今日と
限りの次軍、吉花は働きて、汚名を子孫に傳へずと、士卒と下知ると、勵む。
軍勢もよき勢いと得る。我若らと勇と出美と金鉄よりも重く、
命と鴻毛よりも軽んで、曳を志と揚る血戦を、互に負じと射違ふ。矢々
降雨足より猶あぐく、敵味方の喚き叫ぶ声、百千の雷よりも又勝り、河
水も漲つ、天は騰るべき形勢あり。此働きの武内が軍勢、多くく、
浮立ば、宿祢一旦戦いとまじり、武振熊共々あまると引上誓、時息と、
宿祢と思案とめらる。斯く物狂の敵へ、力と拵と打向は、味方
死亡の者多くと悪かれ、什畧と以て一階は撃んと。三軍は命と弓矢と
鬚の中へと藏し。且木刀と佩し、懐中は悉く真力とあまら、事十分ふ

網へ入り、武内宿祢武振熊共々、降参の体とありて、忍熊王の前へ行
偽つ、皇后の命と奉て、ひひく、吾敢て天下と貪ると、唯幼は
皇子と懐く、兄あり、王は這ひりや、山中和し、うんととあまら、然らば王
み、天業を登る、玉枕と高く、専ら石椀と行ひ、吾豈距る戦
ふとあり、唯願く、共強と絶兵と捨んと、と皇后の仰あり、臣武内
等早くも軍衆の命令して、悉く弦と断刀と解て、河中に投じ、うと傷
り、久に忍熊王其言と真とあり、我方より願ふ所と、其替ひ、うん方
なく、直地は軍兵の命と、軍器と河水は投じ、とせり。武内宿祢武振熊の
兩人、事十分、けりあり、時あり、と、俄に三軍、下知して、
弓小強と、真力と佩面も、うと、撃がれ、忍熊王の、駭き、油
断し、欺られ、後悔、臍と、嚙も、倉見別宿祢五十狹茅宿祢
等、言葉、せり、と、吾既、欺欺、色、今、兵器の、あ、れ、敵對

るに、とひもよらば、唯此の八連の軍勢と引く退くまじらば、と大将先
に逃出さば、倉見別五十挾茅等もつひく陣所と逃行する、唯此戦中
熊之凝の打歩、あふまき、ふ戦ひく、戦没とあそむるなり

忍熊王最期

斯て武内宿祢武振熊の兩將、逃行する、忍熊王の迹と追ひ、かほ悪王と治
あつて、くば、又りや天下の變と起はの本多、此虚は兼どと撃ちんと、何
く、あつて、追行する、遂に阿不城、追付する、此処、又りや戦ひ
敵と撃て、數あつて、逃行敵、行過、処、後逢坂と、偕刃熊王、挾
浪の粟、倉見別等共、逃行しが、又りや、武内追付、軍兵悉く
戦没す、唯忍熊王と倉見別及び五十挾茅等の、幸き命と助かり、此
粟主野、この戦ひ、忍熊王の軍兵共悉く撃ち、とるれば、血の流して、粟
主野は溢り、とる人、其不吉と悪、今ふり、粟主野は出来、菓の

献上り、と禁じられ、決て、所は進まざるなり、斯に、忍熊王、敗るなり、
や、く、近江の瀬田まで逃るなり、と、追ひ、と、忍熊王、と、あひあ、
て、耻辱と重なり、疾ぬ、と、瀬田の渡り、湖中は、沈み、敢て、
最期と、鳴呼、人皇十四代仲哀帝第二の皇子と、ひ、天、
背き、謀叛と起、終、非命と失ふ、是、天、
これ、忍熊王、水、倉見別、宿祢、五十挾茅、
湖、水、人、皇、第七代、孝、天皇、
し、多、牛、血、江、の、地、割、て、湖、
め、と、倉見別、及び、五十挾茅、が、
へ、更、は、知、る、宿祢、大、心、と、
叛、と、企、事、と、得、七、
ふ、入、ひ、捨、あ、ん、と、怒、あ、
申、力、皇、三、草、子、卷、之、五

ゆのてと種々手と尽して搜しゆりふ日と経て後菟道河より疾出
る。宿祢此兩歌て曰く

阿希跡能跡齊多能和多利珥介豆區苦利多那加跡須疑氏于泥珥
等羅倍莞

斯哥ひぬと内心よ深しと厚く厚く厚く武振能共々
軍勢と引く紀伊国小竹宮あり皇后が許へと立歸りまづくのよと奏
るせば皇后も内心と安んじぬ人の軍功と此上も賞をひ別て武内
が軍功今ふらぬと賞するに猶余りありと俸祿許多下されたるが
宿祢もと決して受奉らば臣かしくも三代の君ふ
奉りて恩祿の重きを蒙りて此身も余とべ既に余は祿の朝廷よか
奉らんと日來おひいとされば豈此上は恩祿と載んやとひと固辞し受
奉らぬが自皇后も其赤心と感ずむ世は物かれば老人なりと仰あつて

武内之重んぶるが實の理あり武王泰政が四留銘は留有餘不盡之功以還
造化留餘不盡之祿以還朝廷留餘不盡之財以還百姓留餘不盡
之福以遺子孫と正の宿祢が行ひは克愜へのは篤行する武内されん人の世
ゆらも高羅大明神と祭りて崇むる。あま全く尋常する。高遠
ありればなり

因ふに武内宿祢ハ人皇十二代景行帝十三代成務帝十四代仲
良帝十五代神功皇后十六代應神帝十七代仁德帝とすべし六代
の君は仕奉りて行年二百十六歳あり。仁德帝七十八年冬十月薨す。
六代の王の間政事とすると二百四十余年あり。世は稀なる長寿とひ。
又世は稀なる忠臣あり。既し應神天皇の在位九年夏四月武内宿祢を
して流前の國へむす。西國の探題として遣はる。武内宿祢異
母弟は甘美内宿祢とす。大奸悪なる者ありて

武内宿祢傳

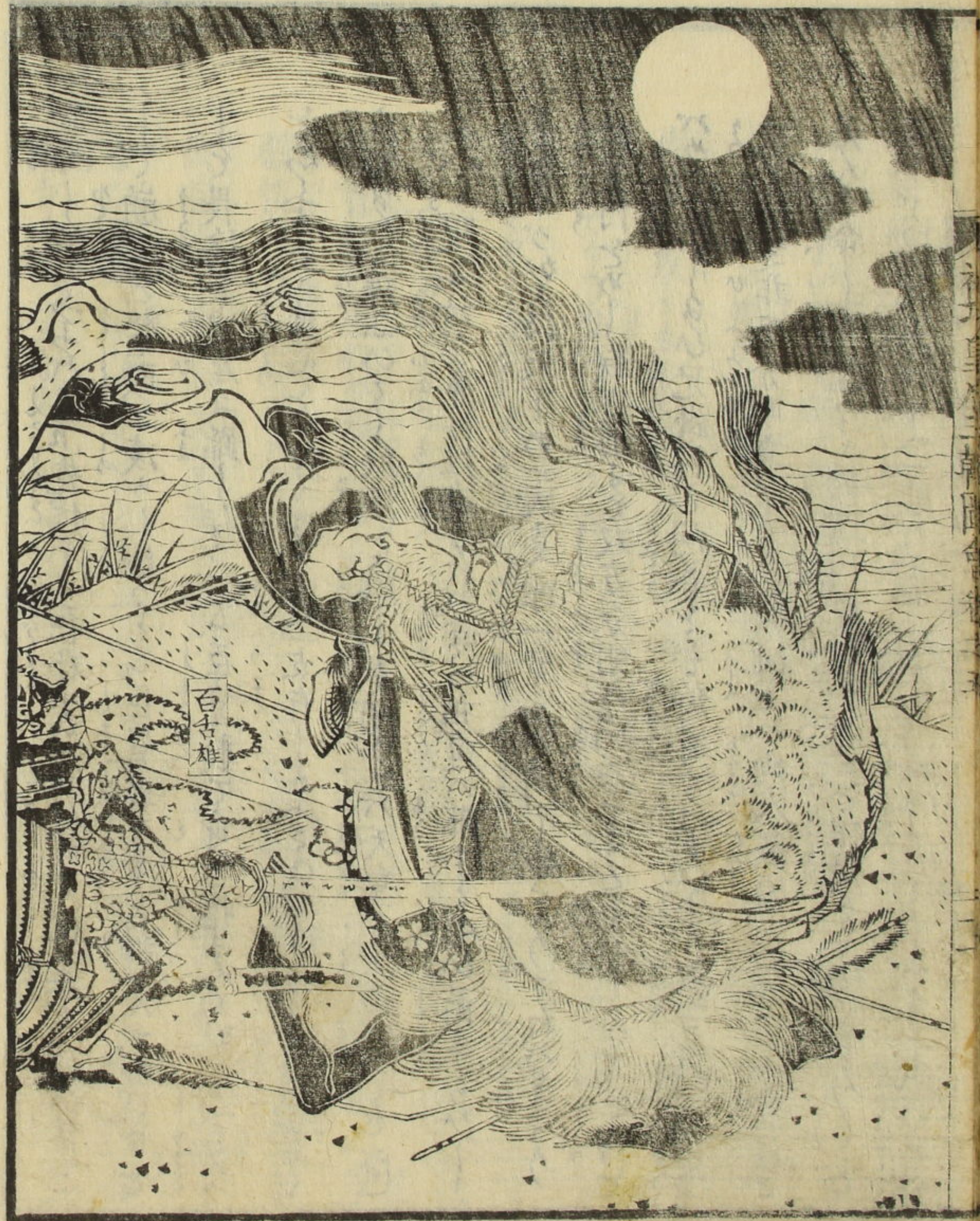
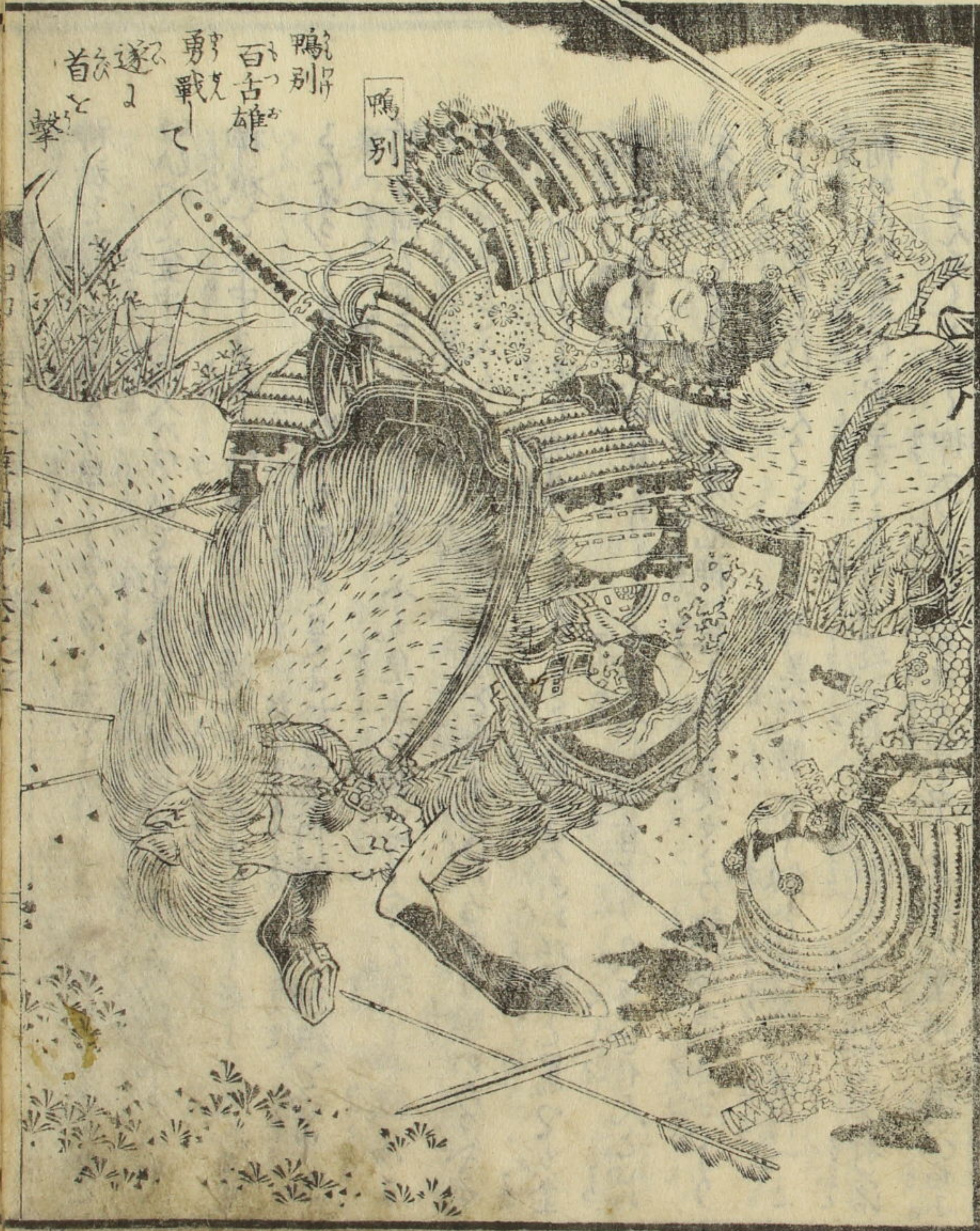
此武内者二百有七歳
甘美内者味濃百歳

兄の威勢のつれを日未羨しくあひ居るるてゆへ天皇ふ羨して兄と失ふ
 とんと思ろくもあひま。天皇へむを羨しくするや。兄武内宿禰人々敬ひあはれ
 侍。其威は誇りて日未天下と我物よせんと望む内心あり兄の恩恵と考の
 身してのや。上らへつてくくもいふ兄とて天下の大事ふへ
 られり。復分明に奉り奉らんが。今武内筑紫は在てかひての望むと違は
 る。此時より三韓の者と招て己は後なり。既天下の變と起さんとするや。
 速う討せざるべし。一大事なり。嗚呼危哉。と詭奏をなす。天皇
 是と聞せり。武内宿禰代々忠臣なれば。豈汝がのみならず。とくも
 やと。更其美内の言と用ひらる。されど其美内ハ猶も言葉と巧
 うして。現弟が口より奏し奉る。一大事なり。何ぞ疑がらせり。とあふん
 やと。理せり。換奏をせ。天皇漸く其美内の言葉と信どらひ。然らば
 つて。武内と撃んやと宜う。其美内事成り。と心中は深く飲む。

勅答うして。兄武内ハ万の事は決断する者なれば。多くの軍勢と
 征伐し。むけあふん。唯一人の勅使は劍と持て遣はる。と大事
 露見と心は悟り。逆も事の成らざるを察して。自めり失ひつすべし。と弁
 舌巧まのまふ。と。天皇善々と宜う。是より一人の勅使は劍と持し。
 余は何の仰も。筑紫へ。とつらされり。時よ勅使筑紫へ。とつて。
 余は勅命の趣も。唯光々る劍と一口武内へ。進め。と武内大い
 駭きて。天と仰で歎くと曰く。吾貳心あり。と。忠と以て君は事奉る。不
 斯余の勅命も。劍斗り。とる。此武内ふ死にべし。との事なり。と
 朽惜き。とされど。吾君より。の美。國。是非も。と。さ。と。あひと。窮
 了。彼劍を。取り。早く。咽は。突を。死せん。と。や。あ。け。壹。伎。道。真
 根子。と。つ。武内。忠臣。あり。其。相。類。武内。ふ。似。る。者。あり。此。形
 勢。と。かん。つ。早く。武内。と。く。大臣。と。く。待。入。の。身。は。黒。き

心の事天下の人より知らる。願くは君死とすりまづ。密に
と避るひ。都は疾を赴せしむ。罪の事死とを辨へし。後死
しむるも晩か。幸ひ僕が相頼く。君は似る。僕大臣不
代つ。死しむ。身の赤心と明さんとす。早く劔と咽。突立
死しむ。武内悲歎。沈みぬ。我此知。居ま。真根子を
大死せし。似る。一端と密に避。都へ赴き天皇を拜。事
明らか。舟と浮れ。出行。勅使も真根子が忠美之感。
彼首級を取。都と歸り。真根子斯の。忠臣也。今
猶筑紫。於て壹伎大明神と祭。宿勅使都へ歸り。天皇へ
彼首級と奉。天皇実。武内首級と。いひ。衣と催
る。天氣曇り。浩く。武内宿祢南海と巡。泰
殿。天皇と拜。事爾。一伍一什と奏。罪を以

と舟して。臣先代。吾君まで五代の間仕へ奉り。後ひ臣と
して崩浪と鬣頭ふ凌。臣豈敢て命と辞せん。後ひ臣と
して畏途と虎尾を踏。臣豈敢て身と惜まん。かく忠美
とあふ。貳心とい。復一点存。敵意とや
らせ。珠ふ。涙と流。奏。天皇。後悔とを
多。現。汝が弟の注進。度。相違。非。雨。斗。ひ
と。天下の。一。席。み。濟。が。り。され。是。より
其美内と。朕。前。まで。双方。分明。の。向。答。せ。と。命。せ。れ。其。美。内。と
が。出。し。む。兄。武。内。と。向。答。と。を。仰。付。ら。れ。ひ。が。双。方。の。論。更。お
決。せ。ば。是。非。不。分。明。る。と。此。上。の。兩。人。熱。湯。と。搦。て。真。傷。と
足。ん。と。命。じ。む。磯。城。川。の。濱。に。一。釜。と。准。備。す。湯。と。る。ん。と
沸。湯。の中。へ。一。顆。の。玉。と。八。是。と。の。兩。人。と。り。武。内。宿。祢



神祇と祈つて倚より早くも入る玉とより上り疑ひをれしや
 つひつて釜中へ投入つてひて甘美内宿祇同く玉と取得んもの也
 神祇と心中よ念ひつてやと沸湯の中へ右手と延して入ると
 るたをくめつてなまり得ども是は於甘美内猶も神祇と心中よ
 祈り何とぞ玉ととらしめり危急と救りせむと又もや熱湯よ
 右手と延して入るとすれど神ハ非禮と受るるにばなでり驗のあるや
 前よひく手と沸湯よすりてと不能のひばあ巧惜と罵つても金
 の四方と蒐巡り此首よりして手と入人彼首より手と付人と心ハ
 矢猛よく男子の天魔鬼神の思まねど炎々たる熱湯よ是又より
 つてとめらばせんころとて甘美内帯せし劍と抜放し武内へと
 斬り落と武内よ早くも飛退透と目ざけし劍よ大地へこと打落
 しもんとつて押へつ武内宿祇大音やく其身の栄利と得人為ふ

兄と我ふ罪とまを其の上よ又氣づくも我と同一く湯と探らん大膽不敵の
 曲者なり争う神祇の御爵と脱れ心を得と罵り了り既よ首と列んとす
 ると天皇あがりと止らむ甘美内大罪人といふせども現よ汝が弟れ
 罪一等と減じ遣り命と助け流すべしと寛仁大度の勅命あれは
 武内よせんころ一命助け遣りて流罪とすらん武内宿
 祇の危難を幸ひ不道も全く其誠忠と神祇も感るるあへや
 つと有がれ事どもあり武内宿祇沸湯と探りて身潔白ふして傷り穢のやれと
 樂の始めとより湯立神樂と行きて身潔白ふして傷り穢のやれと
 しく美とて且又上古物の真傷と乳すよ然れ斯のいれ湯をよ其
 真傷と試しとや
 又云武内宿祇と高羅大明神と祭りて現よ京洛祇園祭礼も行
 々々山鉾の中よ船鉾といふありてあへ人の知るるすく神功皇后

三韓征伐の粧ひとをせしめり。則ち桑原所ハ四柱の神ふして神功
皇后住吉大明神高羅大明神。磯良大明神あり。高羅大明神といふは
則ち武内宿禰といふなり。磯良大明神といふは皇后へひけ。于珠満珠の空珠
と捧げ奉りし。穴門の国の海人と云ふ

吉備鴨別連赴日向防熊襲

更ふ沈吉備鴨別連は皇后三韓へ沛進発の前仲哀天皇九年春二月一千
余騎と引率して日向國あり熊襲の防と赴きり。其時
張本 熊襲の味方夥しくして白井。児湯。那河。宮崎。諸縣を以て楡葉の
軍勢。一万余騎。于戈白日映し。旌旗春風を飄る。分野へ容易く攻取らる
りて。鴨別連心中より為我此度此地へ赴きり。必は熊襲と撃取べ
き為あり。皇后三韓へ進發の時不意に發つて攻来らんと。思ふ
まじく。首尾よく三韓と征伐し。此日本へ帰らせり。近の押へて。金

多しと云ふ。唯此辺り陣所をかま防ごとと専らして我方より攻めらる
ることをあつべし。倘我方より攻めらるるに敗北するに其虚不棄じて熊襲皇后
の所在所まで攻来らるるに一大事ありと深く思慮と巡らり。諸縣の
小陣營とあつし。一千騎と遣へ。鴨別連陣とく。此様子とバカ
り。諸絲の城は籠り。其光景と記して。正す。其城の字と用也
熊襲へ斯と注進あり。熊襲此注進と打問。諸絲の城中の者共唯一戦は彼の
と撃つ。之れが注進の者立帰つ。諸絲の城主百舌雄といふ者
熊襲の下知と告る。城中の軍勢悉く立出。一時鴨別連
へと攻寄り

鴨別連撃百舌雄

鴨別連ハ敵よりして攻来るとあり。止とて得ば自ら一千騎と引率し

真先は馳出、必死とまうく攻戦へど、敵は味方五十倍より大軍とひ殊は鋒と能つひ之とまうく味方と撃と夥し、元来熊襲の一味共は皆日向の者なり、常小海辺は出、此鋒と以く魚と取と手鍊し得と、其鋒の形は柄の長さ五尺斗りあり、先一尺りより石突の所は太鎖と付、差貫いては彼太鎖と以く手あり引寄、亦直地小向と投る小突貫とるといふとまうく其早業電光の如し、されば鴨別連と先途と下知とつて入あると小生とる松ヶ枝と手折あを打とるといふと、王位は致く鳥合の艸城の如く、勇氣と震るとも、何程のしあへん命限り働きて、城徒と撃とる、君りの恩賞受すと、所せど、彼早業の鋒先は、右社左往、北をたると、鴨別連もせんか、るく、自より軍勢の殿して追ひ来る敵と斬拂ひ、薙とる、一世の勇とを震い、る、爰小熊襲の股肱と憑とる、渚原の城主百舌雄、鴨別連が殿の体と見く、是あを官軍の大將と虎狼の如く大音とく、夫より勇士と官軍の大將

と、乃つひひかめら、我は是熊襲の股肱の臣當渚原の城主百舌雄と呼べ、天下ふ知らる、昔よりぞ、敵とつて不足あり、いざ姓名と報とて雌雄と決せ、飽まで廣言ふよ、く、鴨別連も心得く、さあめ、これ一言哉、我こそ汝が推慮は違はば、かゞげ、一夫の君の命と蒙、汝等と誅伐せん、ら、打向ふ、官軍の大將士備鴨別連、尋常に首とせ、と、い、ま、ま、剛賊百舌雄、か、く、と、打、笑、ひ、鋒、と、直、地、に、投、付、と、る、鴨、別、連、劔、と、以、く、手、早、く、あ、ら、く、打、拂、と、る、鋒、の、柄、兩、段、と、る、て、地、は、落、と、る、此、際、百、舌、雄、劔、と、抜、持、鴨、別、連、の、直、向、目、が、け、斬、付、と、る、連、後、へ、飛、退、と、る、い、く、打、と、劔、と、ハ、丁、と、止、り、暫、時、の、間、火、水、と、る、つ、戦、ひ、が、双、方、勇、者、の、と、る、れ、が、劔、の、刃、ハ、鋸、の、ど、く、も、れ、ど、も、戦、ひ、に、決、せ、と、る、遂、に、百、舌、雄、鴨、別、連、が、打、と、劔、と、受、損、い、右、の、肩、先、は、手、疾、と、負、ひ、と、る、所、と、鴨、別、連、躍、り、か、つ、と、首、と、撃、と、る、この、形、勢、小、熊、襲、の、軍、勢、莫、氣、と、り、け、く、又、く、と、る、鴨、別、連、大、音、と、る、渚、原、の、城、主

たつ百舌雄ハ撃取らるる。早く者共引中。残城共と撃されと勢ひも衆い
てやがらふほど。此二言は氣を取直し。今迄放せし官兵等。咄とおろしく引返らば城
兵共の当り。臆病神よとてわらわら。劔を捨て逃出し。楮孫の城へ入ることあり
ば魁主熊襲の筆り。児湯の城へと逃行らる。

鴨別連闘熊襲

まは鴨別連の故北及び勝利となり。勇ま立てて楮孫の城へとつら
推支ゆる者もあはれ。此城へと楮軍勢打入る。これれ休息るは児
湯の城に在る熊襲。百舌雄の故兵が注進と闘ふ。大の怒つ。処々方々
屯せし軍勢と引卒して。楮孫の城と取るまんとあつらる。卷四方八面より攻
まら。其形勢一粒の粟も數千の蟻のたらし。異なる。あそむ。一時は落べく
ぞ刃へくく。鴨別連ハ軍勢を下知とす。一千の人数と四方に分ち。矢
を以て兩ふひく。射立らる。素より射術は妙と得し。官軍なれば。一矢を以て

敵と射と。或ハ二人或ハ三人あり。此矢先は当り。最口惜くあへ。熊襲
とす。楮軍勢。後と刃せし。逃出に。猶も烈しく射さる。あど。一矢を以
て。敗る。児湯の城へ逃入る。此後とも熊襲押寄る。數々
るれど。官兵必死に防ぎ戦ふ。城と再び取らる。空しく
月日を送らる。鴨別連ハ又。我方より敵方へ押し。このころ。た
防戦の用意の。居る。熊襲も攻飽倦。術尽て。刃へ
く。斯く。其翌年の春。あり。己は皇后三韓と征伐。い
め。荒紫へ。歸り。皇子。出生の。鴨別連打。大
の。歡び。勇。立。今。此。知。熊襲と防ぎ。速。雌雄と決。其
く。筑紫へ。其用意。所へ。皇后。勅使。来り
て。長。熊襲の防ぎ。賞。全。汝等。勤。朕。許
朕。難。三韓。送。吾。日本。皇。子。平。産。早。朕。許

由力三韓三韓圖

へと参るべし。此後加勢とてゆけり。今麿坂忍熊の両王朕を
 致き。民と苦む。ゆつて大々とあはれ。朕天は代つ。彼両王を誅せんとあはれ。
 軍勢其方へもむ。ゆつて。先其地を引拂ふべし。熊襲へ其地をゆつて。
 て後日大軍を以て征伐せよ。とある。鴨別連あつが。此勅命を以て
 ゆつて。勅後の上もむ。一先皇后の許へと参らん。今此処を引拂へ
 ば。敵小勇気を付く。似たり。既用意もむ。せよ。唯一戦は勝負を決せん
 と。心中よひと定め。勅使へ。唯勅後之趣兼り。いと清め。て帰せり。

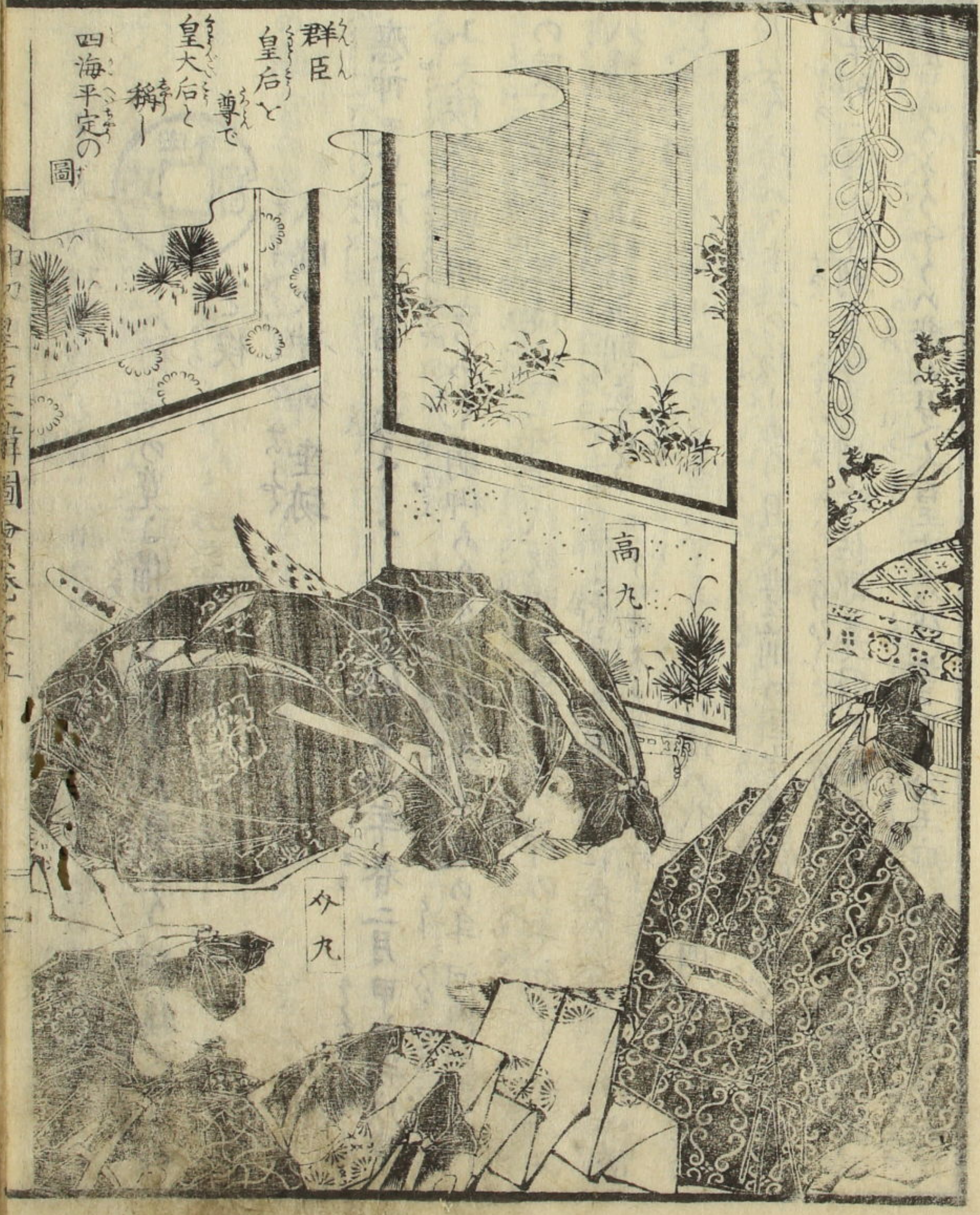
鴨別連夜討熊襲

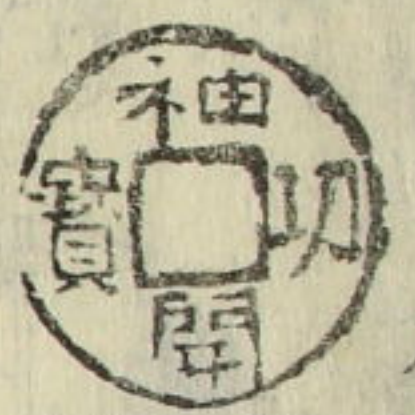
吉備鴨別連は熊襲と勝敗を決せん。信と心中は計略と案。一千人の軍
 勢。事と含め。夜半の頃は。児湯の城へと押向ひ。素より。今まで更
 攻まらんとあつり。官軍の熊襲方。十分の怠りを生じ。油断とほ
 て在れば。城へ近く寄とひ。用意とせ。枯柴は火を付。城中に

て投入。折や。西風烈。て城中暫時燃上。黒煙は天を穿。火光暗
 夜を照して。白日のごとく。海上の雲の波煙の波は混雜。思。く。ん。と。い
 らる。城中の者共。熊襲と始。途方。上と下へと驚き。ま
 駈出。んとあへども。煙は掩り。出ること。唯。色と限り。叫ぶ
 の。浩。る。処へ火の手と刃。処々。方々の熊襲の味方。何と。や。ん。と。い。ふ。の
 ち。雲霞の下。集り。来る。を撃て。と。り。耐。え。取。敵。の。不。意。の。大。衆。
 心。乱。ま。て。同。士。撃。つ。と。り。官。軍。と。相。敵。し。戦。ふ。者。も。あ。れ。ば。官。軍。大。ひ。つ。男
 立。あ。ら。は。ゆ。に。働。き。て。敵。と。撃。つ。数。と。あ。ら。ば。去。程。は。魁。主。熊。襲。へ。と。道。
 べき。路。を。と。覚。悟。と。窮。め。遠。く。火。中。で。自。害。と。り。早。に。余。絨。或。は。差。違
 或。は。火。中。に。飛。入。て。を。成。し。と。り。寄。来。る。熊。襲。の。一。味。の。者。共。半。に。撃
 死。半。に。降。り。と。日。向。は。威。と。震。ひ。熊。襲。を。れ。朝。廷。は。天。討。と。り。
 一時。其。身。を。失。ふ。は。実。に。理。り。と。い。ふ。程。鴨。別。連。は。凱。歌。を。唱

して皇太后とて奉つ。撰政元年と改まらる。此年也。是大歳辛巳の当り。皇太后かく撰政之在り。三韓の征伐とて。我日本は大歳辛巳帝十一代あり。十五代神功皇后。世四代推古天皇。世六代皇極天皇。世八代蘇我天皇。世四十一代持統天皇。世四十三代元明天皇。世四十四代元正天皇。世四十六代孝謙天皇。世四十八代和德天皇。世百一十代。撰政二年冬十一月丁亥朔甲午。仲哀天皇。世陵と河内の國長野とて。造りて。祭り。同日。三年の春正月。孝言田皇子とて。皇太子とす。磐余とて。地は都とす。是と倭の若櫻の宮と稱して。此宮は皇太后。皇太子在り。仲哀帝は元門國の六倭國若櫻都。應神帝は倭國豐明都あり。古今建。曰く。帝都天子の居。天子四海を以て家とす。堂常の処あり。其在所。辰辰。都人の都會あり。斯て六十九年己丑の大歳夏四月辛酉朔丁丑。皇太后若櫻の宮は於て。百年一百歳。うて崩御。ゆ。これ臣下。い。り。万民乃歎き。い。り。冬十月戊午朔壬申。大倭國狹城盾列の陵は葬。奉り。其明年春正月丁亥朔。孝言田太子立て。即位。即。せ。ひ。り。分。は。れ。ん。

四年七十一歳ふ。大倭國経島とて。地は都と造り。これ天下の黎民。万歳と祝。奉り。飲ひの旨とて。い。れ。り。珠は此應神天皇へ。幼き。い。時。う。り。聰達。玄監。深遠。動容。進止。聖の表異とあり。て。い。と。安。ら。う。と。天下と。造。り。入。ぞ。是亦皇太后の。高徳と受。せ。り。ふ。ら。り。が。誰。の。徳。と。仰。ぎ。ま。り。也。世は聖母大明神と稱する。則ち神功皇后の。い。事。あり。因。り。京師の儒家松永氏。神功開宝の古銭と藏せり。この文化十四年丁丑。冬山城國葛野郡三条。基邑の土中と掘。り。て。古。銭。五。箇。と。出。り。其。壺。悉く。毀。り。て。一。壺。の中。より。彼古銭廿五銅出。り。則ち其中の一銅と藏。り。る。と。其。記。書。曰。く。神功開寶。ハ。神。巧。開。寶。と。す。人皇四十八代稱徳帝の。年。号。と。天平神護。と。い。は。れ。則ち神護と神巧と。さ。す。の。の。さ。し。ん。子。と。い。へ。り。或人の。案。に。稱徳帝ハ。四十六代孝謙帝の。再。祚。と。す。則ち女帝あり。これ神功皇后の。高徳と仰。ぎ。申。の。皇。后。三。朝。國。會。卷。之。三。上。乙





神功開寶と有し。のちのちとて、彼古銭の模写其の如く。この好事の覚は備んともあらん。猶後人の考へ

八幡大神御垂跡

應神天皇卅一年一百十歳より。四十二年春二月甲午朔戊申。大倭の國豊明宮より崩御あり。明年辛未の年。河内國長野山の陵に葬奉る。其後人皇三十二代欽明天皇廿年己卯の年初め。此所八幡大神の神社を創立あり。一説に東より赤幡四つに西より白幡と稱し。其年二月廿五日天皇行幸あり。此以後の代々の御門も行幸あり。其年二月廿五日天皇行幸あり。且又豊前の國宇佐八幡大神八同三十二年辛卯二月十日。則ち豊前國宇佐郡菱形の池の辺りより大神比美ふ。此告あり。我の是人皇十六代善田天皇。廣幡八幡磨之令始て

あは顯り。と告あり。是より前も。同國下毛郡野中。宇佐公池寺に神告あり。既に兩度の告あり。欽明天皇左右の奏聞と聞せ。直地と勅使とつら。豊前の國宇佐の宮に奉つれ。又山城の國雄徳山の麓の峯にも。八幡宮へ人皇五十六代清和天皇貞觀元年。大倭の國大安寺の僧行教あり。其身武内宿禰の末葉也。一夏九旬の間。豊前の國宇佐の宮に宮籠せんと。四月十五日より黍菟。七月十五日の夜の夢に。大神都近き地より遷り。王城と守護す。きく。の神勅と家り。同月廿日宇佐と立出。八月廿五日山列山崎の離宮の辺りより。宿禰の國に。其夜又神託あり。男山に鎮坐。は。直地と。宣つ。され。明と待。行教男山に登り。其宮所。定。直地は都。より。黍内。奏。清和天皇。其如。翌。蒙。深く。其神徳と感。九月十九日勅使と下

神工皇居三朝圖會卷二五
二九一
點定せり。中々本権允播良基と詔し、宇佐の廟を准へ。六
宇の宝殿とて造営あり、尤行教として直に當社の別當とあり。以
以來、妻帯とせしむるを仰りて、且重き御神祿とて付與し、い
此行教の後、往古の宇佐の宮は三年一度勅使と立られ奉幣あり
たり。斯男山は勸清の御後、都近きより、専ら此宮の勅使
と立奉幣し、又人皇六十四代圓融院天元二年三月廿七日、石清水八幡宮
行幸し、是此宮へ天子行幸の始めとて、其後三條院鳥羽院、崇徳院、
高倉院、順徳院、後宇多院相續して行幸あり。されば此石清水八幡宮の
二所の宗廟として、日月に祭祀せらるる。公事根元は三月中の午の
日の臨時祭、天慶五年四月廿七日、始めらる。是は過少、平の將門が乱
逆のときあり、八幡大神は祈り、冥助より、

七びらびら、其報賽のとき、臨時祭と奉らる。あつふ、天祿二年三月より、
毎年の事あり侍りて、
因より雄徳山八幡宮と石清水八幡宮とて、當社の下の側、石
の中より流し出る清泉あり、石清水とて、後嵯峨院の御衣よ
「石清水ききこころよむとき、神のちひは猶もたのめ」
又、八幡大神と八幡大菩薩とて、人皇五十二代嵯峨天皇の御
釈空海、弘法と弘み、天皇へ奏聞して、二社の託宣と書きて、世に弘
り、素より空海は世に稀なる能筆といひ、大いに世上行かば、終
小世俗の大菩薩とて、唱へ奉るるあり、菩薩といふは、法苑珠
林に、知諸安、知諸語、知諸於、知諸軌、知諸稱、知諸制、
知其假名、知其無盡、知其寂滅、知一切、此十種の知ありと、菩薩と
して、

